



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

これがあなたがたへのしるしである

主の降誕おめでとうございます。今年のクリスマス、「しるし」として示された幼子イエスについて思い巡らすことにしましょう。与えられた朗読に「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」（2・12）とあり、乳飲み子が主の天使によって羊飼いたちに「しるし」として示されたのでした。

父である神はさまざまなしるしで、人間にご自分の愛をお示しになりました。年老いたアブラハムとサラ夫婦に、息子イサクを与えて生涯忠実に生きたアブラハムをいつくしんでくださいました。のちにイスラエルと呼ばれたイサクの子ヤコブの子孫たちは、モーセを通してエジプトから約束の地に導かれ、イスラエルの民が契約に不忠実になってもあわれみをお忘れになりませんでした。

数々のしるしの中で最後に現れた最大のしるしは、人間に父なる神の愛を完全に証するイエス・キリスト自身でした。幼子イエスは、父なる神が人間を愛しておられる確かなしるしなのです。人を仲介して神の愛のしるしを示したのではなく、神ご自身が決定的なしるしとなってくださったのです。

飼葉桶に眠る幼子は、聖霊が降り、恵みに満たされていたマリアからお生まれになりました。ここに三位一体の働きも見る事ができます。聖霊の働き、父なる神の愛、そしてしるしとなってくださった御子イエス・キリストです。人間の救いに無関心でいられない三位一体の神の神秘が明らかになりました。

羊飼いたちは「布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子」というしるしを見ましたが、もう少し踏み込んで考えてみましょう。「乳飲み子」というしるしは何を指し示しているのでしょうか。

父なる神はさまざまなしるしで人間に対する愛を示してこられたと話しましたが、目の前にいる乳飲み子は、神ご自身が声を上げてくださったというしるしではないのでしょうか。幼子の泣き声は、きっと静かな場所でも響き渡るに違いありません。そのように、人間の救いに無関心でいられない神が、いよいよご自分で声を上げられたということです。

誰の目もはばからずに泣く乳飲み子。これが羊飼いの見た「しるし」だったのだと思います。人々から遠ざけられた誕生でした。産着もありませんでした。心地よいベッドもありませんでした。どんな悲惨な誕生であっても躊躇せず、人間の救いに声を上げてくださった。これが羊飼いに示された人間に対する神の愛の答えだったのだと思います。

では、わたしたちにとって馬小屋に眠る幼子はどんなしるしとなってくださったのでしょうか。それは、「必ずわたしたちを救う」というしるしだと思います。どん底に置かれている人も、お先真っ暗の闇にある人も、必ず救う。その声を今、大声で上げてくださっているのです。

救い主の誕生に、この世はほとんど何の準備もしていませんでした。それでも父なる神はやむにやまれぬ思いで独り子を与えてくださいました。「人間の救いに無関心でいられない」と、救い主は声を上げてくださいました。わたしたちは近づいて、その声を聞きましょう。そして救い主の「必ずわたしたちを救う」という声をより多くの人に届けましょう。クリスマスを通して、神がどれほど人間を愛してくださったか、すべての人が理解できるように、このミサの中で願ひましょう。

主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)